



「いいものを着ると、がんばろう!と思えます」

新潟県にある河渡病院は、県下最大規模の精神科病院であり、アルコール依存症治療の専門病棟を有する病院。今回は新たにユニフォームを導入いただいたご縁で、精神科医療のこれから、また医療の現場でユニフォームの果たす役割などについて、看護部長の吉田さん、看護次長の古島さん、看護主任の廣川さんにお話を伺いました。



住宅街の真ん中にある、地域に開かれた精神科病院。

精神科病院というと郊外にあるイメージだったので、住宅街の中にあることに驚きました。

吉田さん：昭和35年の開業当初このあたりは松に恵まれた郊外で、当院の法人名「恵松会」もそこから由来しています。それから年々開発が進み、現在のような立地になりました。

町の中というこの立地は、患者さんにとってどのような影響があるのでしょうか？

古島さん：実はこの環境というのは、精神科のリハビリにおいて非常に良い点があります。患者さんはいずれ地域に戻って生活されますから、バスに乗ったり、スーパーに行ったりという経験がとても重要です。しかし郊外では、なかなかこういう経験ができません。

吉田さん：精神科のリハビリは、社会に戻るために経験を積むことが大切です。地域で暮らすために必要なことが経験できるこの環境は、とても恵まれていると感じます。

地域の方々との交流もあるのでしょうか？

古島さん：リハビリで外に出ることも多いですし、年に一度開催する文化祭には、近隣の方をお招きしています。また中学生の職業体験授業の受け入れも行っており、実際に患者さんのお世話を体験してもらっています。精神医療に対する理解や関心を深めること、そして医療や看護に接する機会を持ってもらうことで、中学生が将来の職業を決めるヒントになれば、と思います。

河渡病院様では今後の精神科医療について、どのようなビジョンをお持ちですか？

吉田さん：いま精神科の医療は患者さんを収容するのではなく、社会に復帰させることが求められています。そのためには、プライバシーは守りつつ、外との接点を持ち続けることが大切です。患者さんが地域の中で、その人らしく暮らしていけるように援助することが役割だと考えています。

日常の暮らしに近い場所にある河渡病院様の取り組みは、まさに時代が必要としているものですね。



組織に大切にされている実感が、やる気につながる。

続いて、ユニフォームについてお聞きします。今回はどのような経緯でお選びいただいたのでしょうか？

廣川さん：選考委員会を立ち上げて、サンプルを取り寄せて選びました。大切にしたのは、全世代20～60代が働きやすいこと。若いうちはおしゃれなものに目がいきますが、年齢が上がると腕が上がりにくいなどの悩みも出てきます。そこで、見た目だけでなく、着替えやすさ、動きやすさを意識して選びました。

なるほど、着用する色で印象は大きく変わりますね。

廣川さん：患者さんに与える影響は気になったので、サンプルを着用して病棟を回ってみましたね。視覚的な刺激が強すぎないように、最終的にはシックな色味を中心に、好きなものを選ぶようにしました。

新しいユニフォームに袖を通されてみて、ご感想はいかがですか？

吉田さん：通気性も良く動きやすいし、衿の開き具合もベストです。かがむ事が多いので、大きく開かない浅めのVネックはいいですね。

廣川さん：スポーツブランドだからか、可動域が広く、動きもスムーズです。いいユニフォームが支給されると、組織に大切にされていることが実感できて、がんばろうと思えますね。

吉田さん：管理者としても、職員には良いものを着てもらって、モチベーションを上げてもらえるとうれしいですね。今回のアシックスは有名ですから、みんな喜んで着てくれるのではないかと思います。

ユニフォームが動きやすさなど物理的な部分だけでなく、気持ちの部分でもお役に立てれば幸いです。